The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多民族社会における言語使用の実際 : タンザニア、ウケレウェ調査報告
Author(s)	小森, 淳子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1998, 8, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

多民族社会における言語使用の実際
― タンザニア、ウケレウェ調査報告* ―

小森　淳子

１．はじめに

タンザニアはスワヒリ語が国の公用語として広く浸透しており、アフリカ固有の言語を「国家語」として定着させた成功例に数えられている(竹村 1993)。その一方で、タンザニアに１２０以上ある民族語がスワヒリ語の勢力下で「衰退」の過程にあるとも言われている(Batibo 1992)。

本稿の目的は、タンザニアのウケレウェで行った社会言語学的調査の結果に基づいて、スワヒリ語と民族語の使用に関する一つの実例を報告するものである。

言語と民族に関する質問票を用いた面接調査の結果をもとに、２節ではウケレウェの民族と言語の関係について報告し、言語の威信について考察する。３節では言語使用の状況について検討していく。まず以下に、調査の概要を記しておこう。

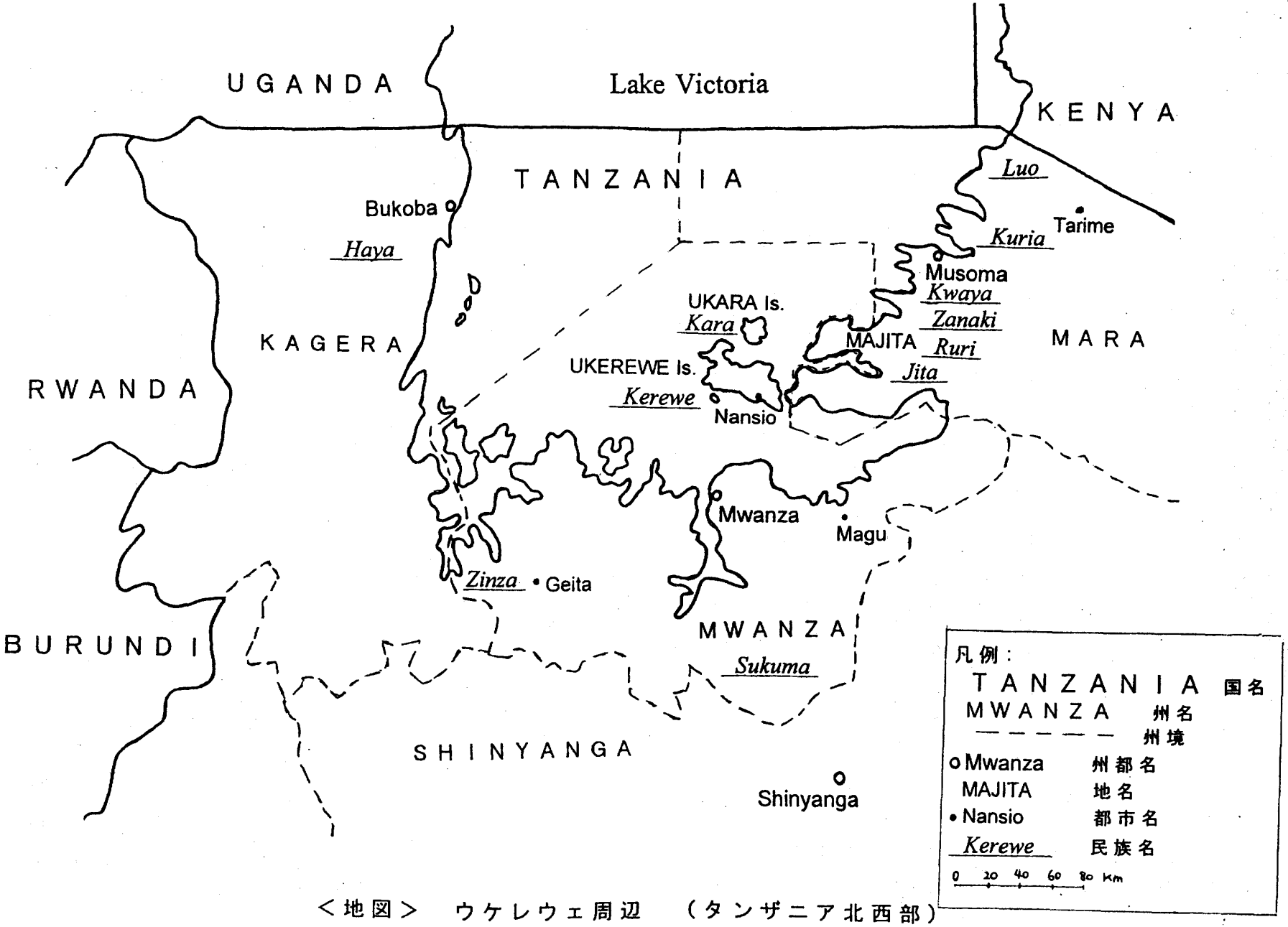
1.1　調査地と調査目的

調査は、９７年８月～１１月に、ビクトリア湖の南方に位置するウケレウェ島のナンシオでおこなった（地図参照)。

ウケレウェ島はムワンザの北方約７０kmの湖上に位置し、面積は約６４０k㎡、日本の淡路島くらいの大きさである。北隣にはカラ島がある。ウケレウェ島とカラ島、及びその回りの島々を併せてムワンザ州のウケレウェ県をなしており、ナンシオが県庁所在地である。本稿で「ウケレウェ」という場合、ウケレウェ島のみならず、ウケレウェ県全体を指すものとする。

ウケレウェ島はかつては東端が大陸側とつながっており、ビクトリア湖に突き出る半島の一部分だった。それを、他民族からの襲撃を防ぐために、半島の細くくびれた（もともと湿地帯だった）部分に溝渠が掘られ、さらに第一次世界大戦の時に、タンガニーカを支配していたドイツが輸送船を沿岸沿いに運行させるためにその溝渠を広げたので、今では大陸から５kmほど離れた島となっている。

島に古くからいる民族として、ケレウェ人、ジタ人、カラ人、ルリ人の名が挙げられる。



＜地図＞　ウケレウェ周辺　（タンザニア北西部）

ケレウェ人は１７世紀頃、湖の対岸のブコバ方面から移住してきて島を支配した。６４年にタンザニアが成立して各民族の首長が名目上廃止されるまで、１７代を数える首長（スワヒリ語でmtemi、ケレウェ語でomukama）がいた。

ジタ人は１８世紀の終わり頃、大陸側から移住し始めた。ジタ人はマジタを故地に、３代の首長がいたと言われている。同じ頃、カラ島に住むカラ人も人口圧のためウケレウェ島に移住を始めている。ルリ人の故地はマジタの北側である。

ウケレウェの総人口は約２０万人。民族別の統計はないが、ジタ人が最も多く、ケレウェ人、カラ人と続き、ルリ人が一番少ないと言われている。また、新たな移住民族としてムワンザ州の大民族であるスクマ人の数も増えつつあるが、全体としてはまだ少数派である。さらに、ナンシオはウケレウェの中心地であるため、商業や公的機関の従事者として他地域からの移住者もおり、小規模ながら他民族の混在する都市的状況を示している。

ウケレウェのナンシオを社会言語学的調査の対象地として選んだのは、上に述べたような民族の状況を踏まえて、多民族状況の中での言語使用について調査できるという点である。各地域の中心となる町の大なり小なりの都市化はアフリカの今日的状況であり、そのような地方の小都市における民族と言語使用の実態を明らかにすることが、この調査の目的である。

1.2　調査方法と対象者

調査は、民族と言語に関する質問票（1.3 節参照）を用いて、スワヒリ語による面接方式でおこなった。調査対象者はウケレウェ在住の男女１０５人である。大半はナンシオ在住であるが、一時的にナンシオを訪れていた近隣の村の在住者も含まれている。

調査対象者の内訳は以下の通りである。全員がナンシオ及びその近隣の村の在住者であるが、出生地がウケレウェかウケレウェ以外かで分けることができる。ウケレウェ以外で生まれた人を、ここでは「非ウケレウェ生まれ」と呼ぶ。i)が出生地による内訳、ii)が年齢と性別による内訳である。

(1)調査対象者内訳

i)	ウケレウェ生まれ	６６人
	非ウケレウェ生まれ	３９人
	計	１０５人

ii)

年齢	男	女	計
５０歳以上	８	１０	１８
４０歳代	９	６	１５
３０歳代	１０	９	１９
２０歳代	１３	１５	２８
１０歳代	１３	１２	２５
計	５３	５２	１０５

調査対象者は、筆者がナンシオの市場や路上、滞在先の家（ケレウェ人家庭）やその近所で出会った人々である。ウケレウェに在住していることを確認し、調査について説明した後、聞き取り調査をおこなった。

１０歳以下の子供にも聞き取り調査を試みたが、有効な回答を得ることができなかった。１０歳以下の子供については、観察から得られた知見を必要に応じて呈示する。

1.3　質問票と質問のねらい

質問表は別掲の通りである。この質問票のねらいは３つある。第１に、ウケレウェの民族構成を大まかに把握すること。第２に、実際の使用言語と、使用場面を明らかにすること。第３に、各人の言語に対する意識、いわゆる言語態度を調査することである。

今回の調査では、言語使用や言語態度の調査に有効な質問票を作成すること自体も一つの課題であった。そのため、この質問票は始めからこの形ではなく、面接を進めながら、より効率的な質問ができるようにと改変を加え、質問の順番や内容を変更していった結果の形である。

１～８は個人の基礎的データである。９～１４は両親・配偶者の民族と使用言語を明らかにする。１５～２０も対話者別の使用言語を見るものである。このうち１９、２０の質問は今回の調査のために途中からつけ加えた。１５、１６の質問に対する回答に「相手がどの民族かによる」というものが多く、また、ケレウェ人、ジタ人に対する言語使用に注目すべき現象が見られたためである。この質問票ではジタ人、ケレウェ人など具体的な名を挙げているが、他地域での調査にはその地域に共存する民族名を挙げればよいであろう。「近隣の異なる民族の人と話す時に何語を使うか」という質問は、多民族の混在する状況が一般的なアフリカの調査には特に有効かと考える。

質問票

1. 名前　2. 性別　3. 年齢　4. 職業　5. 教育歴
6. 民族　7. 出生地　8. 居住地（転居歴も含む）

9. 父の民族
10. 父とは何語を使って話すか。
11. 母の民族
12. 母とは何語を使って話すか。
13. 配偶者の民族
14. 配偶者とは何語を使って話すか。

15. 兄弟とは何語を使って話すか。
16. 友人とは何語を使って話すか。
17. 子供とは何語を使って話すか。
18. 祖父母とは何語を使って話すか。

(19. ジタ人とは何語を使って話すか。)
(20. ケレウェ人とは何語を使って話すか。)

21. どんな言語を話すことができるか（聞いて分かる言語も含む）。
22. 次の場所、場面では何語を使うか。
・役所、郵便局　・警察、裁判所　・学校　・市場　・教会　・近所　・家庭
(23. どんな時にスワヒリ語を使うか。)

24. どの言語が一番簡単か。
25. どの言語が一番好きか。
26. 子供にどの言語を一番よく話して欲しいか。
27. 親はあなたにどの言語を話すことを望んでいるか。

２２は場面による使用言語を調査するものである。この質問に対しても、場面によっては「話す相手による」という回答が多かったため、スワヒリ語の使用の実態をより明らかにするねらいで２３の質問を追加した。

２４～２７は言語態度に関する質問である。２４は日常使い慣れている言語を明らかにし、２５～２７はどの言語に威信(prestige)があると感じているかを調べるものである。言語の威信については2.4節で詳しく見る。

それでは以下に調査結果を見ていこう。まず、２節で民族構成と言語能力について分析し、言語の威信について考える。３節では言語使用、特にウケレウェに特徴的な点について見ていく。

２．民族と言語能力

2.1　民族構成

調査対象者の民族別の人数は(2)の通りである。結果データは表１(-1, -2)である。ウケレウェ生まれより非ウケレウェ生まれの方が、多様な民族構成になっていることが分かる。

(2)　調査対象者の民族　(人数)

	ウケレウェ生まれ	非ウケレウェ生まれ	計
ケレウェ	３３	7	４０
ジタ	２２	8	３０
スクマ	1	6	7
クワヤ	2	3	5
カラ	4	0	4
チャガ	1	3	4
ルリ	1	1	2
ハ	1	1	2
クリア	0	2	2
ニランバ	0	2	2
ヘヘ	1	0	1
ランギ	0	1	1
ザラモ	0	1	1
ジグワ	0	1	1
ニャムエジ	0	1	1
ルオ	0	1	1
ルワンダ	0	1	1
計	６６	３９	１０５

ケレウェとジタが全体で６７％(１０５人中７０人)を占めていることが分かる。ウケレウェ生まれに限って見れば、８３％(６６人中５５人)がこの２つの民族で占められている。母がケレウェあるいはジタである人も含めると、全体では７９％(８２人)、ウケレウェ生まれでは９２％(６１人)になる。非ウケレウェ生まれでは、ケレウェかジタである人は３９％(３９人中１５人)だが、母・配偶者のいずれかにケレウェかジタのいる人も含めると６９％(２７人)になる。これは、ウケレウェ出身者と結婚した女性や、ウケレウェ出身の親が他地域にいる時に生まれ、その後ウケレウェへ戻った子供などが含まれるからである。これらのことから、ウケレウェの主要民族はケレウェとジタであると言えよう。

カラ、ルリもウケレウェに古くからいる民族と言われているが、今回の調査対象者には多くなかった（それぞれ、４人、２人)。それよりも、スクマ(７人)、クワヤ(５人)の方が多かった。それぞれムワンザ、ムソマを中心とした地域の民族である。

表１－１　民族：ウケレウェ生まれ

No.	性	歳	本人/父	母	配偶者
1	男	80	K	K	J
2	男	69	ｶﾗ	ｶﾗ	K
3	女	68	K	K	K
4	男	67	K	J	K
5	男	64	K	K	K
6	女	60	K	K	K
7	女	59	K	K	K
8	女	59	K	K	―
9	男	58	J	ﾙﾘ	J
10	女	58	J	J	J
11	男	55	K	K	K
12	男	51	J	J	J
13	女	50	K	K	J
14	女	50	K	K	K
15	女	49	K	K	K
16	男	48	ｶﾗ	ｶﾗ	ｶﾗ
17	男	46	K	K	J
18	男	45	J	ｶﾗ	K
19	女	45	K	K	K
20	男	44	K	J	J
21	男	44	K	K	K
22	男	43	K	K	K
23	男	42	K	K	ｽｸﾏ
24	女	41	K	K	K
25	男	39	K	ｼﾞﾝｻﾞ	J
26	男	39	ｶﾗ	ｶﾗ	K
27	女	38	ｶﾗ	ｶﾗ	ｶﾗ
28	女	38	J	J	K
29	男	36	K	K	ﾑｳｪﾗ
30	女	35	K	K	J
31	男	34	J	ﾙﾘ	K
32	女	34	K	K	―
33	女	33	ｽｸﾏ	J	ｽｸﾏ
34	男	30	J	J	―
35	男	30	J	K	J
36	女	30	K	K	J
37	女	29	K	K	―
38	男	27	K	K	K
39	男	27	K	J	K
40	女	27	K	J	―
41	男	26	J	K	K
42	男	26	J	K	J
43	女	26	K	K	J
44	男	24	K	K	―
45	男	24	J	J	―
46	女	24	J	J	K
47	男	23	K	K	―
48	女	23	J	J	―
49	女	23	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	―
50	男	22	J	K	―
51	男	18	ﾍﾍ	K	―
52	男	18	ｸﾜﾔ	J	―
53	男	16	J	K	―
54	男	16	ｸﾜﾔ	J	―
55	女	16	J	J	―
56	男	15	J	K	―
57	男	15	J	J	―
58	女	15	ﾊ	K	―
59	女	15	J	J	―
60	女	15	K	K	―
61	男	14	K	K	―
62	男	14	J	J	―
63	女	14	J	K	―
64	女	13	ﾙﾘ	J	―
65	女	13	J	ﾆﾗﾝﾊﾞ	―
66	男	11	K	K	―

（注）本人の民族はすべて父の民族と同じである。母・配偶者の民族も併せて表記する。
表1-2の非ウケレウェ生まれでは出生地とウケレウェの滞在年も併記してある。
略号　K：ケレウェ　J：ジタ

表１－２　民族：非ウケレウェ生まれ

No.	性	歳	本人/父	母	配偶者	出生地(州，町/村)	滞在年
67	女	75	K	K	K	Mara, Kibara	70
68	女	62	ハ	ハ	K	Tabora, Ushetu	35
69	女	58	ｼﾞｸﾞﾜ	ﾄﾞｳｪ	K	Pwani, Mandera	22
70	男	55	ｸﾜﾔ	ﾙﾘ	J	Mara, Musoma	25
71	男	49	ﾆﾗﾝﾊﾞ	ﾆﾗﾝﾊﾞ	ﾆﾗﾝﾊﾞ	Singida,	23
72	女	48	J	J	K	Mara, Mwibara	16
73	女	45	J	J	ｸﾜﾔ	Mara, Majita	23
74	女	45	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	Kilimanjaro, Moshi	25
75	男	43	ﾙﾘ	ﾙﾘ	J	Mara, Musoma	13
76	女	39	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	Kilimanjaro, Moshi	3
77	男	38	ｸﾜﾔ	J	ﾊﾔ	Mara, Musoma	21
78	男	37	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	K	Mwanza, Mwanza	23
79	男	32	J	ﾙﾘ	K	Mara, Buasi	4
80	男	32	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	Mwanza, Misungwi	7
81	女	31	ﾙｵ	ﾙｵ	K	Mara, Tarime	13
82	女	31	ｽｸﾏ	K	ｽｸﾏ	Mwanza, Mwanza	7
83	女	29	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	Shinyanga,	4
84	女	29	ﾙﾜﾝﾀﾞ	ﾙﾜﾝﾀﾞ	ﾊﾔ	Kagera, Bukoba	1
85	女	29	J	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	Mara, Bunda	6
86	女	29	K	ｽｸﾏ	K	Mwanza, Misungwi	10
87	女	28	J	ｶﾗ	ｱﾗﾌﾞ	Mara, Musoma	13
88	男	27	ｸﾘｱ	ｸﾘｱ	ｸﾘｱ	Mara, Tarime	3
89	男	27	ｸﾘｱ	ｸﾘｱ	―	Mara, Tarime	3
90	男	27	J	K	ｽｸﾏ	Mara, Kiabakari	13
91	女	27	ﾗﾝｷﾞ	J	J	Mwanza, Geita	8
92	女	27	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	ｶﾗ	Mwanza, Nyamangoro	8
93	男	24	K	K	―	Dar es Salaam	2
94	女	24	K	K	ﾙﾘ	Mara, Kibara	22
95	男	23	ﾆｬﾑｴｼﾞ	ﾆｬﾑｴｼﾞ	―	Mwanza, Geita	5
96	女	21	ｶﾌﾞﾜ	ﾙﾘ	―	Mara, Musoma	2カ月
97	男	17	K	J	―	Mwanza, Sengerema	14
98	女	15	J	J	―	Mara, Musoma	12
99	女	15	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	―	Mwanza, Mwanza	3
100	女	14	J	K	―	Mara, Musoma	6
101	女	14	ﾆﾗﾝﾊﾞ	K	―	Mara, Bunda	7
102	男	13	K	K	―	Mara, Kisorya	4
103	女	13	ﾁｬｶﾞ	J	―	Mwanza, Mwanza	6
104	男	12	ｻﾞﾗﾓ	J	―	Pwani,	9
105	男	11	K	K	―	Kigoma, Kigoma	9

また、非ウケレウェ生まれの出生地を見ると、近隣の県や州が多い。ウケレウェに隣接するマラ・ムワンザ・カゲラ州からの出身者は７９％(３１人)、約８割になる。ナンシオのような地方の小都市では、仕事（商売、農・漁業、公務員など）のために移住してくる場合でも、遠隔地からでなく、近隣の地域からが多いと言うことができるだろう。

2.2　言語能力

次に、各人が「話せる（あるいは聞いて分かる）と答えた言語」について見てみよう。結果は表２(-1, -2)の通りである。民族との関係が分かるように、話せる（聞いて分かる）言語を民族（表１で示したもの）と並記してある。

まず、全員がスワヒリ語が話せると答えている。調査はスワヒリ語でおこなったが、意志の疎通に問題はなかった。これはタンザニアにおけるスワヒリ語の浸透を物語るものであるが、ナンシオがまちであることも大きな要因である。ナンシオでは就学前の子供達が路上で遊んでいる時にもスワヒリ語を使っているのが観察されたが、近隣の村ではそのようなことはない。「まち」と「村」ではスワヒリ語の浸透に差があることは、タンザニアの他の地域でも見られることである（Polome 1980, Yoneda 1996)。

次に、ウケレウェの地域の言語として、ジタ語とケレウェ語が使用されていることが分かる。ウケレウェ生まれでは全員がジタ語かケレウェ語の少なくとも１つを話せると答えている。非ウケレウェ生まれでも、７４％(２９人)がジタ語かケレウェ語の少なくとも１つを話せると答えている。「聞いて分かる」と答えた人も含めると、１人を除いて全員になる[1)]。民族構成では、ケレウェ・ジタ人は全体の６７％であったが、言語に関しては全体の９０％（９５人）の人がジタ語あるいはケレウェ語を話せると答えているのである。ジタ・ケレウェ語については次節でさらに詳しく分析する。

また、カラ語あるいはルリ語を「話せる（聞いて分かる)」と答えている人が、全体で４３％(４５人)いる。民族構成では、カラ・ルリ人は全体の６％(６人)であり、母・配偶者にカラ・ルリを含む人を合わせても１４％(１５人)であった。このことから、カラ・ルリ語もジタ・ケレウェ語に次ぐ地域の言語であることを表しているとも考えられるが、カラ・ルリ語の場合、ジタ語と似ているために理解できるのだとも考えられる。例えば「カラ語がわかる」と答える人には「カラ語はジタ語に似ているから」といったコメントをつけて回答する場合が多かった。実際、カラ・ルリ語はジタ語と同じ系統分類に入り、その違いは方言程度の差であると言われている[2)]。

回答者の民族（あるいは母・配偶者の民族）と異なる民族語を「話せる（聞いて分かる）」と挙げる理由には大きく分けて２つある。１つは、上のカラ・ルリ語の例のように、習得している言語に似ているから分かるという理由、もう一つは、当該の言語が話されている地域に長くいたことがある、あるいはその言語の話者が身近にいる（あるいは友人にいる）という理由である。前者の例には、カラ・ルリ語の例の他に、ケレウェ語の話者がジンザ語やハヤ語を挙げる例がある[3)]。

後者の理由で最も多く回答された言語はスクマ語である。スクマ語はムワンザ州を中心にウケレウェの南東方面一帯で話されている言語であり、話者数もタンザニアで最も多い。そのため、ムワンザやマグなどの町に滞在していた期間にスクマ語を覚えたという回答が多かった。また、ウケレウェに移住してきたスクマ人が近所にいて分かるようになったという回答者もいる[4)]。

以上をまとめると、アフリカの多くの地域でそうであるように、ウケレウェでも各人は複数の言語能力を有している。タンザニアの公用語であるスワヒリ語、地域の言語であるジタ語あるいはケレウェ語、さらに、個人の来歴により別の言語が加わる。それは両親・配偶者の民族語や滞在歴のある地域の言語、習得しているものと同系統の言語などである。

話せる（聞いて分かる）言語の数を年齢別に見てみると、おおよそ、年齢が上がるに従って言語の数も増えると見ることができる。年齢が上がるほど、他地域での滞在経験や他民族の人との交流などの機会が増えるからだと言えよう。次の(3)は、両親・配偶者の民族語以外で「話せる（聞いて分かる）」と答えた言語の延べ数（スワヒリ語、英語を除く）と、それを人数で割った数（一人当たりの言語数）である。

(3)

年齢	延べ言語数	人数	一人当たりの言語数
５０歳以上	５５	１８	３．０６
４０歳代	３６	１５	２．４０
３０歳代	３５	１９	１．８４
２０歳代	６７	２８	２．３９
１０歳代	２７	２５	１．０８

２０代と３０代では逆転しているが、２０代３０代を合わせた平均言語数は２．１７であり、おおむね年齢と言語数が比例していると言えよう。

表２－１ 言語能力：ウケレウェ生まれ

No.	性	歳	本人/父	母	配偶者	話せる（聞いて分かる）言語
1	男	80	K	K	J	S J K ルリ (ｼﾞﾝｻﾞ) (ﾊﾔ)
2	男	69	ｶﾗ	ｶﾗ	K	S J K ｶﾗ (ﾙﾘ)
3	女	68	K	K	K	S (J) K (ｶﾗ) ｽｸﾏ
4	男	67	K	J	K	S J K ｶﾗ ﾙﾘ
5	男	64	K	K	K	S (J) K (ｶﾗ) (ﾙﾘ) (ｽｸﾏ)
6	女	60	K	K	K	S J K
7	女	59	K	K	K	S J K ｶﾗ ｽｸﾏ
8	女	59	K	K	―	S J K ｶﾗ (ｽｸﾏ) (ｼﾞﾝｻﾞ) (ﾊﾔ)
9	男	58	J	ﾙﾘ	J	S J K ｶﾗ ﾙﾘ ｽｸﾏ
10	女	58	J	J	J	S J (K) ｶﾗ ﾙﾘ
11	男	55	K	K	K	S J K ｽｸﾏ
12	男	51	J	J	J	S J (K) ｶﾗ (ﾙﾘ) ｽｸﾏ
13	女	50	K	K	J	S J K ｶﾗ ﾙﾘ ｸﾘｱ
14	女	50	K	K	K	S J K (ﾙﾘ) (ｸﾜﾔ) (ｼﾞﾝｻﾞ) (ﾊﾔ)
15	女	49	K	K	K	S J K (ｶﾗ) (ﾙﾘ)
16	男	48	ｶﾗ	ｶﾗ	ｶﾗ	S J K ｶﾗ (ﾙﾘ) (英語)
17	男	46	K	K	J	S J K ｶﾗ (ｼﾞﾝｻﾞ)
18	男	45	J	ｶﾗ	K	S J K ｶﾗ (ﾊﾔ) (英語)
19	女	45	K	K	K	S J K (ｽｸﾏ)
20	男	44	K	J	J	S J K (ｶﾗ) (ｽｸﾏ) (ｼﾞﾝｻﾞ)
21	男	44	K	K	K	S J K (ｶﾗ) (ｼﾞﾝｻﾞ) (ﾊﾔ)
22	男	43	K	K	K	S J K (ｶﾗ)
23	男	42	K	K	ｽｸﾏ	S J K ｶﾗ ﾙﾘ
24	女	41	K	K	K	S J K
25	男	39	K	ｼﾞﾝｻﾞ	J	S J K
26	男	39	ｶﾗ	ｶﾗ	K	S J (K) ｶﾗ (ﾙﾘ) ｽｸﾏ 英語
27	女	38	ｶﾗ	ｶﾗ	ｶﾗ	S J (K) ｶﾗ
28	女	38	J	J	K	S J K (ｶﾗ) (ﾙﾘ) ｽｸﾏ (ﾊﾔ)
29	男	36	K	K	ﾑｳｪﾗ	S J K ｶﾗ ﾙﾘ (ｼﾞﾝｻﾞ) (ﾊﾔ)
30	女	35	K	K	J	S J K (ｶﾗ)
31	男	34	J	ﾙﾘ	K	S J K ﾙﾘ
32	女	34	K	K	―	S J K (英語)
33	女	33	ｽｸﾏ	J	ｽｸﾏ	S J (K) (ｶﾗ) (ﾙﾘ) (ｷｽﾞ) (ｽｳｪﾀ)
34	男	30	J	J	―	S J K (ｶﾗ) ｽｸﾏ
35	男	30	J	K	J	S J K (ｶﾗ) (ﾙﾘ)
36	女	30	K	K	J	S J K

（表２－１つづき）

37	女	29	K	K	―	S	J	K				(ﾍﾍ)(英語)
38	男	27	K	K	K	S	J	K				
39	男	27	K	J	K	S	J	K				(ﾊﾔ)
40	女	27	K	J	―	S	J	K			ｽｸﾏ	ﾊﾔ
41	男	26	J	K	K	S	J	K	(ｶﾗ)	(ﾙﾘ)		
42	男	26	J	K	J	S	J	K			ｽｸﾏ	ｼﾞﾝｻﾞ(ﾊﾔ) 英語
43	女	26	K	K	J	S	J	K	(ｶﾗ)	(ﾙﾘ)	(ｽｸﾏ)	(ｼﾞﾝｻﾞ)(ﾊﾔ)
44	男	24	K	K	―	S	J	K				
45	男	24	J	J	―	S	J	K			(ｼﾞﾝｻﾞ)	(ﾊﾔ)(ｸﾘｱ)(ﾙｵ)
46	女	24	J	J	K	S	J	K				
47	男	23	K	K	―	S	(J)	K		(ﾙﾘ)		(ﾊﾔ) 英語
48	女	23	J	J	―	S	J	(K)			(ｽｸﾏ)	(ｼﾞﾝｻﾞ)(ﾊﾔ)
49	女	23	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	―	S	J	K				(ﾁｬｶﾞ)
50	男	22	J	K	―	S	J	K				
51	男	18	ﾍﾍ	K	―	S	J	K				
52	男	18	ｸﾜﾔ	J	―	S	J	(K)	(ｶﾗ)	(ﾙﾘ)		
53	男	16	J	K	―	S	J	K				
54	男	16	ｸﾜﾔ	J	―	S	J	(K)		(ﾙﾘ)		
55	女	16	J	J	―	S	J	(K)				
56	男	15	J	K	―	S	J	(K)				
57	男	15	J	J	―	S	J	(K)				
58	女	15	ﾊ	K	―	S	J	(K)				(ﾊ)
59	女	15	J	J	―	S	J	(K)				英語
60	女	15	K	K	―	S	(J)	K		(ﾙﾘ)	(ｽｸﾏ)	
61	男	14	K	K	―	S	J	K	(ｶﾗ)	(ﾙﾘ)		
62	男	14	J	J	―	S	J	K				(ｼﾞﾝｻﾞ)
63	女	14	J	K	―	S	J	K				
64	女	13	ﾙﾘ	J	―	S	J	(K)				
65	女	13	J	ﾆﾗﾝﾊﾞ	―	S	J	(K)				
66	男	11	K	K	―	S	J	K				

略号　S：スワヒリ

表２－２　言語能力：非ウケレウェ生まれ

No.	性	歳	本人/父	母	配偶者	話せる（聞いて分かる）言語
67	女	75	K	K	K	S （J） K （ﾙﾘ） （ｽｸﾏ）
68	女	62	ﾊ	ﾊ	K	S （J） K ｽｸﾏ ﾊ ﾆｬﾑｴｼﾞ ｽﾝﾌﾞﾜ
69	女	58	ｼﾞｸﾞﾜ	ﾄﾞｳｪ	K	S J K ｼﾞｸﾞﾜ （ﾊﾔ）（ｸﾘｱ）（ﾆｬｷｭｰｻ）
70	男	55	ｸﾜﾔ	ﾙﾘ	J	S J （K） ﾙﾘ
71	男	49	ﾆﾗﾝﾊﾞ	ﾆﾗﾝﾊﾞ	ﾆﾗﾝﾊﾞ	S J ｽｸﾏ ﾆﾗﾝﾊﾞ
72	女	48	J	J	K	S J K ｽｸﾏ
73	女	45	J	J	ｸﾜﾔ	S J （K）（ｶﾗ）（ﾙﾘ） （ｽｸﾏ） ｻﾞﾅｷ
74	女	45	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	S J K ﾁｬｶﾞ
75	男	43	ﾙﾘ	ﾙﾘ	J	S J （K） ﾙﾘ （ﾙｵ）
76	女	39	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	S ﾁｬｶﾞ
77	男	38	ｸﾜﾔ	J	ﾊﾔ	S J K （ｽｸﾏ） ﾊﾔ ｶﾞﾝﾀﾞ ﾙﾝﾃﾞｨ
78	男	37	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	K	S （J） K （ｽｸﾏ）
79	男	32	J	ﾙﾘ	K	S J K ﾙﾘ ｽｸﾏ
80	男	32	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	S （J）（K） ｽｸﾏ
81	女	31	ﾙｵ	ﾙｵ	K	S （J）（K） ﾙｵ
82	女	31	ｽｸﾏ	K	ｽｸﾏ	S K ｽｸﾏ
83	女	29	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	S J K ｽｸﾏ
84	女	29	ﾙﾜﾝﾀﾞ	ﾙﾜﾝﾀﾞ	ﾊﾔ	S （K） ﾊﾔ ﾙﾜﾝﾀﾞ ﾆｬﾝﾎﾞ ﾊﾝｶﾞｻﾞ ｽﾋﾞ
85	女	29	J	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	S J （K） ｽｸﾏ
86	女	29	K	ｽｸﾏ	K	S J K （ｶﾗ）（ﾙﾘ） ｽｸﾏ
87	女	28	J	ｶﾗ	ｱﾗﾌﾞ	S J （K） （ｶﾗ）（ﾙﾘ） ｽｸﾏ
88	男	27	ｸﾘｱ	ｸﾘｱ	ｸﾘｱ	S （J）（K） ｸﾘｱ ﾙｵ
89	男	27	ｸﾘｱ	ｸﾘｱ	―	S （J）（K） ｸﾘｱ
90	男	27	J	K	ｽｸﾏ	S J K ｶﾗ ｽｸﾏ ｻﾞﾅｷ ｷｽﾞ
91	女	27	ﾗﾝｷﾞ	J	J	S J K ﾙﾘ ﾊﾔ
92	女	27	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	ｶﾗ	S J （K） ｶﾗ ｽｸﾏ
93	男	24	K	K	―	S J K
94	女	24	K	K	ﾙﾘ	S J K ｽｸﾏ
95	男	23	ﾆｬﾑｴｼﾞ	ﾆｬﾑｴｼﾞ	―	S J K ｽｸﾏ ﾆｬﾑｴｼﾞ
96	女	21	ｶﾌﾞﾜ	ﾙﾘ	―	S （J）（K） ﾙﾘ ｻﾞﾅｷ ｶﾌﾞﾜ （ｸﾘｱ）
97	男	17	K	J	―	S J K
98	女	15	J	J	―	S J 英語
99	女	15	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	―	S J （K） （ｽｸﾏ）
100	女	14	J	K	―	S J （K）
101	女	14	ﾆﾗﾝﾊﾞ	K	―	S （J）（K） ﾆﾗﾝﾊﾞ
102	男	13	K	K	―	S J （K）
103	女	13	ﾁｬｶﾞ	J	―	S J （K）
104	男	12	ｻﾞﾗﾓ	J	―	S （J）（K） （ｻﾞﾗﾓ）
105	男	11	K	K	―	S （K）

2.3　ジタ語の優勢

それでは、ウケレウェの地域語と見られるジタ語とケレウェ語について、特に民族との関係からもう少し詳しく見てみよう。２つの言語に焦点を当ててみると、ジタ語の方がケレウェ語より優勢的であることが分かる。各言語を「話せる」と答えた人数（「聞いて分かる」は除く）は以下のようであった。

(4) ジタ語・ケレウェ語の能力

	ウケレウェ生まれ	非ウケレウェ生まれ	計
ジタ語が話せる	６２人(９４%)	２５人(６４%)	８７人(８３%)
ケレウェ語が話せる	５１人(７７%)	１７人(４４%)	６８人(６５%)
両方話せる	４７人(７１%)	１３人(３３%)	６０人(５７%)

ジタ語の能力を有する人の方がケレウェ語の能力を有する人より多いことが分かる。ジタ語の方が優勢的であることは、以下のように民族との関連から見るとさらに明確になる。

全体の５７%(６０人)はジタ語もケレウェ語も話せると答えているが、逆に見れば、ジタ語だけ話せる（ケレウェ語は聞いて分かるだけ、あるいは分からない）人は２７人、ケレウェ語だけ話せる（ジタ語は聞いて分かるだけ、あるいは分からない）人は８人ということになる（計３５人)。この３５人を民族との関連で見ると、ケレウェ語だけ話せると答えた８人は、必ず両親や配偶者の民族がケレウェと関係あるが、ジタ語の場合は必ずしもそうではない。それぞれの内訳を下に見てみよう。

(5) 1.　ケレウェ語だけ話せて、ジタ語は話せない/聞いて分かるだけ

ウケレウェ生まれ	４人（全員、両親・配偶者がケレウェ人）
非ウケレウェ生まれ	４人（両親・配偶者のいずれかにケレウェ人がいる）
計	８人

(5) 2.　ジタ語だけ話せて、ケレウェ語は話せない/聞いて分かるだけ

ウケレウェ生まれ	１５人 (この内、両親・配偶者のいずれにもジタがいない－３人)
非ウケレウェ生まれ	１２人 (この内、両親・配偶者のいずれにもジタがいない－４人)
計	２７人

(5.1)のケレウェ語だけ話せる人の中には、両親・配偶者に一人もケレウェ人がいないという人はいないが、(5.2)のジタ語だけ話せる人の中には、両親・配偶者に一人もジタ人がいないという人が７人(２６%)含まれている。つまり、ケレウェ語だけ話せる人はその言語能力に民族との関連がみられるが、ジタ語だけ話せる人には民族との関連がみられない人もいるということである。

ジタ語の方がケレウェ語より民族との関連が薄いことは、別の角度から見ても明らかである。次の(6)は民族との関連なくその言語能力があるかどうかを見たものである。

(6)1.　両親・配偶者のいずれにもジタがいない人の中で、ジタ語が話せる人

ウケレウェ生まれ	２９人中	２５人	(８６%)
非ウケレウェ生まれ	２３人中	１１人	(４８%)
計	５２人中	３６人	(６９%)

(6)2.　両親・配偶者のいずれにもケレウェがいない人の中で、ケレウェ語が話せる人

ウケレウェ生まれ	１８人中	６人	(３３%)
非ウケレウェ生まれ	２１人中	５人	(２４%)
計	３９人中	１１人	(２８%)

(6)からも、ジタ語の方がケレウェ語より、民族との関連なく習得される割合が高いことが分かる。つまりウケレウェでは、ケレウェ語よりジタ語の方が優勢的であると言える。それでは、このジタ語の優勢は何に起因するのであろうか。この事を考えるために、次に言語の威信についてみていこう。

2.4　言語の威信(prestige)

2.3 節では、地域の言語としてジタ語が優勢であることを見た。特に１０歳代の低年齢層で、ケレウェ語に対するジタ語の優勢が顕著である[5)]。言い方を変えれば、ジタ語の方がケレウェ語より威信があるということになる。

言語の威信とは、政治的、社会的、文化的な要因に基づいて、ある言語が他の言語に対してもち得る相対的な優位性のことである。つまり、勢力のある社会の言語や文化的に優位な社会の言語、行政的に認められた言語などの威信は高くなる。威信ある言語は言語能力や言語態度の調査結果から見て取ることができる。母語以外の言語として多くの人がそ

の能力を有している言語や、習得したいという希望の多い言語は威信が高いといえる。ジタ人以外の人がジタ語を習得している割合の大きさから、ウケレウェではケレウェ語よりジタ語の威信が高いと言えるのである。

しかし、ジタ語の威信もスワヒリ語の威信の高さには及ばない。それは、全員が「スワヒリ語が話せる」と答えた言語能力の点からも、また、以下に見る言語態度に関する回答からもうかがえる。

言語の威信を表す一つの指標として、その言語を子供に習得させたいかどうかという質問がある(Batibo 1992:87, Rottland & Okombo 1992:282)。言語態度に関する質問２５～２７の「好きな言語」や「子供に望む言語」に対する回答を見ると、どちらの質問に対しても自民族語を挙げた人が最も多く、次いでスワヒリ語が多かった[6)]。自民族語以外に望まれる言語として、スワヒリ語とジタ語には歴然とした差があり、スワヒリ語の威信の高さは、ジタ語とは異なり、回答者に明確に意識されているものだといえよう[7)]。

以上をまとめると、威信ある言語は現象として、民族の枠を超えてより多くの人に話されていることにあらわれる。その点からみればスワヒリ語が最も威信が高いと言える。スワヒリ語は、小学校の教授用言語、マスメディアの言語、また議会や裁判などの公的な場の言語として、タンザニアの公用語の地位を不動のものとしている。スワヒリ語の威信の高さは人々の言語態度の中にもあらわれている。それに対して、ジタ語の威信の高さは、ウケレウェの地域語の中でより広く使われていることにあらわれているが、人々の言語態度の中にはスワヒリ語のように意識されたものとしてはあらわれていない。

Batibo(1992) はタンザニアの言語の威信を４段階に分けている。スワヒリ語だけが有している National Prestige、地域的なレベルで歴史的、文化的、軍事的優位にあった民族の言語が有する Regional Prestige[8)]、近隣の言語にのみ影響を与える言語の Local Prestige、そして特別な Prestige なしの段階である。この段階に当てはめてみると、ジタ語は近隣のケレウェ語に影響を与えている Local Prestige を有する言語と言えよう[9)]。

ジタ語のこの威信はウケレウェにおけるジタ人の人口の多さによると考えられる。ウケレウェのみの民族別の人口統計はないが、Grimes(1988)によればジタ人の総人口は約２１万人、ケレウェ人は約１０万人とあり、全体ではジタ人の人口はケレウェ人の２倍以上になる。

ジタ人は大陸側のマジタからウケレウェへ移住してきており、その人口流入は今も変らない。一方、ケレウェ人は１７世紀以降、ウケレウェを支配してきた民族であるが、ウケ

レウェ以東に版図を拡大することなくウケレウェに留まっている。ケレウェ人は独自の伝統文化を保持しているが、社会的な上下関係や支配関係はもはや存在しない。逆に、ジタ人が社会的、経済的な地位や支配力をもっているといった事例も観察されておらず、今のところ社会的な優位性や支配関係がジタ語の威信を高める要因となっているとは考えられない。そこで、ジタ語の優勢を説明する要因として、ジタ人の人口の多さを考えるのがもっとも妥当といえるだろう。

3．言語使用の状況

複数の言語が使用されている社会で、それぞれの言語が特定の使用領域(domain)をもち、異なる用途で使用されている状況は、一般に「二言語変種使い分け(diglossia)」と呼ばれている(ロメイン 1994:58)。

タンザニアはスワヒリ語と民族語の diglossia の状態から、さらにスワヒリ語の領域が民族語の領域を浸食して拡大する傾向にあると言われている(Yoneda 1996)。スワヒリ語が拡大していく最後の領域は「家庭」である。二つの言語が同じ領域で競合するようになると、二言語が同じ程度に使われ続けるのではなく、どちらかの言語に移行(shift)し始める。民族語からスワヒリ語への移行が今日のタンザニアの言語状況であり、それをとらえて民族語が「衰退」の過程にあると言われているのである。ここでは、ウケレウェのスワヒリ語の使用状況と、ウケレウェの特徴的な民族語の使用状況を見てみよう。

3.1　スワヒリ語の使用状況

ウケレウェでもタンザニアの他の地域と同様、スワヒリ語の使用領域は広い。質問 22 の回答では、役所、郵便局、警察、裁判所、学校などの公的な場や多くの人が集まる場所（市場、教会など）では、ほとんどの人がスワヒリ語を使うと回答している。また質問 23（どんな時にスワヒリ語を使うか）では「旅行」や「仕事」、「町（ナンシオやムワンザなど)」という回答がみられる。さらに、「ケレウェ語もジタ語もわからない人と」「他民族の人と」などの回答からうかがえるように、スワヒリ語は異民族間のリンガ・フランカとしての機能を果たしている。

スワヒリ語の使用領域が公的な場を占めていることは明らかである。では、民族語の使用領域として最後まで残るといわれる「家庭」での状況を見てみよう。「家庭」と言ってもそこでの使用言語が常に一つであるとは限らない。実際、複数の言語が用いられており、

対話者によっても使う言語に相違が見られる。そこで対話者別に使用言語を見てみよう。結果データは表３(-1, -2)である。家庭内の対話者として父、母、配偶者、子供を挙げる。

表３を見ると、スワヒリ語の使用には年齢との相関が見られる。年齢層が低いほどスワヒリ語の使用頻度が高くなる傾向がある。スワヒリ語を使うという回答を年齢別にまとめると(7)のようになる。

(7) a.　両親(あるいはどちらかの親)に対してスワヒリ語を使う(民族語との併用も含む)

４０歳以上	３％（３３人中１人）[10]
２０～３０歳代	２６％（４７人中１２人）[11]
１０歳代	６４％（２５人中１６人）

b.　配偶者に対してスワヒリ語を使う（民族語との併用も含む）

４０歳以上	１３％（３２人中４人）
２０～３０歳代	４５％（３３人中１５人）

c.　子供に対してスワヒリ語を使う（民族語との併用も含む）

４０歳以上	４２％（３３人中１４人）
２０～３０歳代	７９％（２９人中２３人）

(7)を見るとおおよそ年齢層が低いほどスワヒリ語の使用頻度が高くなっていることがわかる。それは話者の年齢層に対しても対話者の年齢層に対しても見られる傾向である[12]。低年齢層ほどスワヒリ語の使用頻度が高くなるのは、タンザニアの他の地域でも見られる現象であり、話者、対話者の年齢とも低くなるほどスワヒリ語の使用が多くなることがYoneda(1996)でも報告されている。

家庭内の(特に低年齢層の)スワヒリ語の使用頻度の高さは、スワヒリ語がその領域を拡大しつつあることを示していると指摘することもできるが、それをもって民族語が「衰退」の過程にあるとは一概に言えない。親に対してスワヒリ語を使うと回答した１０歳代でも、民族語との併用の方が多い。１０歳代で父、母それぞれに対してスワヒリ語しか使用しないと答えたのは、延べ５０人中１５人（３０％）[13]であり、１０歳代でも７０％が民族語か民族語との併用である。スワヒリ語と民族語の併用といっても実際にはどちらが主に用いられているのか、どのような場面で用いられているのかなどを観察しなければ、民族語使用の実体は明らかにならないが、今回の聞き取りによる調査の結果からでは、民族語はまだその使用領域を家庭内に保持していると言えよう。

表３－１　言語使用：ウケレウェ生まれ　　表４－１

No.	性	歳	父	母	配偶者	子供と	Ｊ人と	Ｋ人と
1	男	80	K	K	J／ K	K	―	K
2	男	69	ｶﾗ	ｶﾗ	K	ｶﾗ, K	ｶﾗ	K
3	女	68	K	K	K	S	K	K
4	男	67	K	J／K	K	S，K	K，S	K
5	男	64	K	K	K	K	K	K
6	女	60	K	K	K	K	K	K
7	女	59	K	K	K	K	K	K
8	女	59	K	K	―	K	K	K
9	男	58	J	ﾙﾘ／J	J	S，J	J	K
10	女	58	J	J	J	S，J	J	J
11	男	55	K	K	K	K	K	K
12	男	51	J	J	J	J	J	J
13	女	50	K，S	K，S	J／K	S	―	K
14	女	50	K	K	K	S	K	K
15	女	49	K	K	K	K	―	K
16	男	48	ｶﾗ, J	ｶﾗ, J	ｶﾗ, J	ｶﾗ, J	J	K
17	男	46	K	K	(J)／K	S，K	K	K
18	男	45	J	ｶﾗ／J	K／J	J	J	J
19	女	45	K	K	K	K	K	K
20	男	44	K	J	J／K	S，J	―	―
21	男	44	K	K	K	S，K	K	K
22	男	43	K	K	K	K	K	K
23	男	42	K	K	(ｽｸﾏ)／S，K	K	K	K
24	女	41	K	K	K	S，K	K	K
25	男	39	K	(ｼﾞﾝｻﾞ)／K	J／ K	S，K	J	K
26	男	39	ｶﾗ	ｶﾗ	K／S，ｶﾗ	S	J	J
27	女	38	ｶﾗ	ｶﾗ	ｶﾗ	S，ｶﾗ	J，ｶﾗ	J，ｶﾗ
28	女	38	J	J	(K)／S	S	J	J
29	男	36	K	K	(ﾑｳｪﾗ)／S	S	K	K
30	女	35	K	K	J／K	S，K	J，K	K
31	男	34	J	(ﾙﾘ)／J	K／J	J	J	―
32	女	34	K，S	K	―	―	J	K
33	女	33	(ｽｸﾏ)／J	J	(ｽｸﾏ)／S	S，J	J	J
34	男	30	J	J	―	―	J	J，K
35	男	30	(J)／K	K	J	J	J	K
36	女	30	K	K	J／K	S，K	K	K

37	女	29	K	K	—	—	J	K
38	男	27	K	K, S	K, S	—	J	K
39	男	27	K	J/K	K	S, K	K, J	K
40	女	27	K	J	—	—	J, S	K
41	男	26	J	K	K	K	—	K
42	男	26	J	K, J	J	—	J	K
43	女	26	K	K	J/K	S	J	K
44	男	24	K	K	—	—	J	K
45	男	24	J	J	—	—	—	—
46	女	24	J	J	K/J	S	J	J
47	男	23	K, S	K	—	—	—	K, S
48	女	23	J, S	J, S	—	—	J, S	J, S
49	女	23	(ﾁｬｶﾞ)/S	(ﾁｬｶﾞ)/S	—	—	J	K
50	男	22	J, S	K, S	—	—	J	S
51	男	18	(ﾍﾍ)/S	K	—	—	J	K
52	男	18	ｸﾜﾔ, J	J	—	—	J	J
53	男	16	J	(K)/J, S	—	—	J	K
54	男	16	(ｸﾜﾔ)/J, S	J, S	—	—	J, S	J, S
55	女	16	J	J	—	—	J	K
56	男	15	J, S	(K)/S	—	—	J	S
57	男	15	J	J	—	—	J	J
58	女	15	(ﾊ)/S	K, S	—	—	—	—
59	女	15	J	J	—	—	J	J
60	女	15	K	K	—	—	S	K
61	男	14	K, S	K, S	—	—	—	—
62	男	14	J	J	—	—	J	J
63	女	14	J	K/J	—	—	J	J
64	女	13	(ﾙﾘ)/J, S	J, S	—	—	J, S	S
65	女	13	J, S	(ﾆﾗﾝﾊﾞ)/S	—	—	—	—
66	男	11	(K)/S	(K)/S	—	—	S	S

表の見方: 父、母、配偶者の欄には民族名が記され、その民族語を用いて会話する場合はそのままである。その民族語と別の言語も併用する場合、コンマで併記する(例えばNo.16は父がカラ人で、父に対してカラ語とジタ語を使用する)。使用する言語が民族名と異なる場合、民族名を( )に入れ、/ の後ろに使用する言語名を記す。その際、対話者はその民族語を使用する場合、民族名は( )に入れない(例えば、No.1は配偶者がジタ人であり、配偶者はジタ語を、本人はケレウェ語を使って会話する。No.17も配偶者がジタ人であるが、二人ともケレウェ語を使って会話する。No.23は配偶者はスクマ人であるが、二人ともスワヒリ語かケレウェ語を使う。)「子供と/J人と/K人と」の欄はそれぞれの対話者との会話で使用する言語名を記す。 — は質問が不適切であったことを示す。

表３－２　言語使用：非ウケレウェ生まれ　　表４－２

No.	性	歳	父	母	配偶者	子供と	Ｊ人と	Ｋ人と
67	女	75	K	K	K	K	K	K
68	女	62	ハ	ハ	K，S	S，ハ，K	—	—
69	女	58	ｼﾞｸﾞﾜ	(ﾄﾞｳｴ)/ｼﾞｸﾞﾜ	(K)/S	S	—	—
70	男	55	(ｸﾜﾔ)/ﾙﾘ	ﾙﾘ	J	J	J	J
71	男	49	ﾆﾗﾝﾊﾞ	ﾆﾗﾝﾊﾞ	ﾆﾗﾝﾊﾞ	ﾆﾗﾝﾊﾞ	J	—
72	女	48	J	J	K	K	J	K
73	女	45	J	J	(ｸﾜﾔ)/J	S，J	J	J
74	女	45	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ，S	S，ﾁｬｶﾞ	S	S
75	男	43	ﾙﾘ	ﾙﾘ	J	ﾙﾘ，J	J	J
76	女	39	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ	ﾁｬｶﾞ，S	S	S	S
77	男	38	ｸﾜﾔ	J	ﾊﾔ，S	J	J	J，K
78	男	37	(ｽｸﾏ)/S	(ｽｸﾏ)/S	(K)/S	S	S	S
79	男	32	J	(ﾙﾘ)/J	K	J	J	K
80	男	32	ｽｸﾏ，S	ｽｸﾏ，S	ｽｸﾏ，S	S	J	K
81	女	31	ﾙｵ	ﾙｵ	(K)/S	S	—	—
82	女	31	ｽｸﾏ，S	K，S，ｽｸﾏ	(ｽｸﾏ)/S	S	—	K
83	女	29	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	S	S，J	S，K
84	女	29	ﾙﾜﾝﾀﾞ	ﾙﾜﾝﾀﾞ	ﾊﾔ	ﾊﾔ	S	S
85	女	29	J，S	ｽｸﾏ，J，S	ｽｸﾏ	S	J	J
86	女	29	K	ｽｸﾏ	(K)/S	S	J	K
87	女	28	J，S	(ｶﾗ)/J，S	(ｱﾗﾌﾞ)/S	S	J	J
88	男	27	ｸﾘｱ	ｸﾘｱ	ｸﾘｱ	—	S	S
89	男	27	ｸﾘｱ	ｸﾘｱ	—	—	S	S
90	男	27	J	K	(ｽｸﾏ)/S	S	J	K
91	女	27	(ﾗﾝｷﾞ)/S	J	(J)/S	S	J	—
92	女	27	ｽｸﾏ	ｽｸﾏ	ｶﾗ	—	J	—
93	男	24	K	K	—	—	J	K
94	女	24	K	K	(ﾙﾘ)/J	J，S	J	K
95	男	23	ﾆｬﾑｴｼﾞ	ﾆｬﾑｴｼﾞ	—	—	J	K
96	女	21	(ｶﾌﾞﾜ)/ﾙﾘ	ﾙﾘ	—	—	J	K
97	男	17	K	J/K	—	—	J	K
98	女	15	J，S	J	—	—	J	J
99	女	15	(ｽｸﾏ)/S	(ｽｸﾏ)/S	—	—	—	—
100	女	14	J，S	K/S	—	—	—	—
101	女	14	ﾆﾗﾝﾊﾞ，S	K/S	—	—	—	—
102	男	13	K/J	K/J	—	—	J	J
103	女	13	ﾁｬｶﾞ/S	J	—	—	—	—
104	男	12	ｻﾞﾗﾓ/S	J/S	—	—	S	S
105	男	11	K/S	K/S	—	—	S	S

3.2　民族語の使用状況

公的な場面ではスワヒリ語が優勢的に用いられるが、ウケレウェの主要な民族語であるジタ語、ケレウェ語は家庭外でも使用されている。場面毎の使用言語を問う質問 22 の中の「近所」では、スワヒリ語より民族語を使用するという回答が多かった[14]。さらに相手をジタ人、ケレウェ人と限定して尋ねる質問(19, 20)では、スワヒリ語を使用するという回答は１７％(延べ９６人中１６人)で、あとは民族語の名前が挙げられた。結果は表３の隣に表４(-1, -2)として併記してある。ジタ/ケレウェ人に対して、ジタ/ケレウェ/カラ語を使うという回答が、合わせて約８割を占める[15]。

民族語の使用についてさらに詳しく見ると、ある特徴的な点に気づく。それは対話する者がそれぞれ異なる言語を用いるという状況である。表３でＪ/Ｋ、Ｋ/Ｊなどのように記されている点はこのことを表している。Ｊ/Ｋは、対話者(ジタ人)はジタ語で、本人はケレウェ語で会話することを表し、Ｋ/Ｊは、対話者(ケレウェ人)はケレウェ語で、本人はジタ語で会話することを表している。また表４からは、必ずしもジタ人に対してジタ語、ケレウェ人に対してケレウェ語を使うとは限らないことが分かる。

このような組み合わせが見られるのは、ジタ語－ケレウェ語、ルリ/カラ語－ジタ語、カラ語－ケレウェ語である。このうち、ジタ、ルリ、カラ語は注 2)にも述べたように、言語間の類似性がきわめて高く、相互理解が可能であることが分っている(Downing 1990:5)。そのためこれらの言語間では、お互いが異なる言語を用いても会話ができるのである。

ここで興味深いのは、ジタ語(あるいはカラ語)とケレウェ語の場合である。これらの言語は異なる系統に属しているが、回答者はお互いの言語を聞いて理解し合うと述べている。質問 19, 20 の回答者を、次のようにジタ人とケレウェ人に限って見てみると、このことがさらにはっきりする。

(8) a.　質問 19「ジタ人と話すのに何語を使うか」

有効回答を得たケレウェ人　　３８人

- ケレウェ語を使う　　１９人(５０％)
- ジタ語を使う　　１４人(３７％)
- スワヒリ語を使う　　５人(１３％)

b.　質問 20「ケレウェ人と話すのに何語を使うか」

有効回答を得たジタ人　　２８人

ジタ語を使う	１５人(５４％)
ケレウェ語を使う	１０人(３６％)
スワヒリ語を使う	３人(１０％)

(8)にまとめた結果を見ると、ジタ人とケレウェ人が話す場合、約半数の人がそれぞれ自分の言語を使うと答えている。またその場合、対話者は対話者の言語を用いて話し、それで理解し合うのだと述べている。ジタ語とケレウェ語は言語的な系統は異なるが、長期間の共存の結果、それぞれの話者はお互いの言語を理解するようになっている[16)]。そのため、お互いの言語を用いての会話が可能なのである。

また注目すべきは、各人の言語選択のあり方である。2.3 節で見たように、ウケレウェではジタ語が地域の民族語として優勢であるが、ジタ人と話すのに、必ずジタ語を用いるというほどの強制力が働くわけではない。例えば(8a)で、ジタ人と話すのにケレウェ語を使うと答えた１９人の内、ジタ語が話せないのは３人である。残りの１６人は、ジタ語も話せるがケレウェ語を用いると答えているのである[17)]。つまり、ジタ語の優勢が強制的に言語の選択を強いるというようなことは見られず、相互理解が可能な状況である限り、各人はその言語能力と意志に応じて言語選択を行っているのである[18)]。

４．まとめ

ウケレウェの民族と言語使用に関する調査の結果をまとめると次のようになる。ウケレウェの主要民族はケレウェとジタであると言える。言語能力の調査では、スワヒリ語に次いでジタ語の能力が高く、地域の民族語としてはジタ語の方がケレウェ語より優勢的であることが分かった。

スワヒリ語の能力の高さは、タンザニアの公用語としてスワヒリ語がウケレウェにも深く浸透していることを表している。公的な場や教会での使用言語もスワヒリ語であり、特に「村」に比べて「まち」(ナンシオ)での普及や、低年齢層の使用が顕著である。

ウケレウェの民族語の中ではジタ語がもっとも優勢であるが、スワヒリ語のような高い威信ではなく、人口の多さに起因する威信を持っていると考えられる。

ウケレウェでもスワヒリ語が普及し、タンザニアの他の地域と同様、スワヒリ語の使用

領域は広いが、家庭内や「近所」では民族語の使用領域が残っていると言える。

ウケレウェの民族語の状況で興味深いのは、ジタ語がケレウェ語を圧倒しているのではなく、両者が拮抗している点にある。全体にはジタ語の優勢は明らかであるが、ケレウェ語も主要民族の言語として使用されており、ウケレウェ生まれでは全員がジタ語もケレウェ語も聞いて理解できる（非ウケレウェ生まれでも８４％が両方聞いて理解できる)。

そこで、対話者がそれぞれケレウェ語とジタ語を用いて会話することが可能であり、家庭内においてさえ、そういった使用状況が見られるのである。これは、ウケレウェでの両民族の共存が長く、しかも、ジタの人口が他を圧倒するほど多数を占めるのではなく、また、スワヒリ語のような強い威信を持つ言語でもないためだと言えよう。逆に言えば、２つの言語が共存し、相互理解の可能な状況にあるのは、民族関係にそのような均衡が保たれていることを示しているとも考えられる。

さらに今後の継続的な調査によって、民族語の盛衰の要因と過程が明確な形で捉えることができるであろう。特に、スワヒリ語とジタ語の威信に押されているケレウェ語の状況は、興味深い資料を提示してくれることになるだろう。

注

＊　本報告は、平成９年度文部省科学研究費補助金による国際学術研究「東アフリカにおける地域共通語に基づく文化圏生成とエスニシティの構造」(研究代表：宮本正興・大阪外国語大学教授)の一環としておこなわれた。

1)　「ジタ語もケレウェ語も分からない」と答えたのはNo. 76の女性である。モシ出身のチャガ人で、両親・配偶者もチャガ人である。ナンシオ滞在歴は3年、小学校教師で職場でも家庭でもほとんどスワヒリ語を使っていると答えている。同じくモシ出身のチャガ人女性（No. 74, 45歳）は、両親、配偶者もチャガ人であるが、ジタ語、ケレウェ語も話せると答えている。この違いは、ナンシオ滞在歴の違い(No. 75の女性は25年)と職業(No. 75は雑貨商）が客観的要因として考えられよう。

2)　Nurse & Philippson(1980)では、400語の語彙を比較して言語間の類似度を測っている。その結果によれば、ジタ語、ルリ語、クワヤ語、カラ(レギ)語が一つの分類（Suguti グループ）に属し、グループ内の類似率は81.5%と高い。

3)　同じくNurse & Philippsonの分類では、ケレウェ語、ジンザ語、ハヤ語は、ウガンダのニョロ語やニャンコレ語などと共にRutaraグループに分類されている。グループ内の類似率は66.5%である。

4)　両親、配偶者にスクマ人がいないがスクマ語が話せる人は、たいていスクマ語が話されている土地にいたことがある。いくつかの例を挙げると、No. 7(女59ケレウェ)：ムワンザの中学校に４年、教師専門学校に２年、計６年いた。No. 12(男51ジタ)：センゲレマ

に７年いた。No.26(男 39 カラ)：マグで８年、ムワンザで２年小学校教師をしていた。No.28(女 38 ジタ)：マグの技術専門学校に３年いた。No.42(男 26 ジタ)：センゲレマの中学校に４年いた。No.79(男 32 ジタ)：ムワンザの看護学校に２年、ゲイタで病院勤め３年、などである。

5)　１０代の２５人中、ジタ語が話せるのは８４％(２１人)、ケレウェ語が話せるのは３２％(８人)である。この割合の差は２０代以上と比べると著しい。２０代以上ではジタ語が話せるのは８３％(６６人)、ケレウェ語が話せるのは７５％(６０人)である。

6)　調査結果は以下の通りである。今回の調査では 26 番の質問と 27 番の質問を同一の人にせず、子供のある人には 26 番、ない人には 27 番の質問をしたので、結果は一つにまとめた。どちらも複数回答を認めた。

a. 25 番「好きな言語」
(延べ回答数１１９)

自民族語	４１％（４９）
スワヒリ語	３８％（４５）
英語	８％（１０）
その他	１３％（１５）
計	１００％（１１９）

b. 26/27 番「子供に望む言語」
(延べ回答数９７)

自民族語	５５％（５３）
スワヒリ語	３１％（３０）
英語	５％（５）
その他	９％（９）
計	１００％（９７）

どちらの回答でも自民族語が一番多いが、「子供に望む言語」の方がさらに多い。「その他」の言語の大半は、母あるいは配偶者の民族語である。自民族語を挙げる理由はどちらの場合も、「私の言語 (lugha yangu) だから」「家の言語 (lugha ya nyumbani) だから」というものであり、スワヒリ語を挙げる理由は「国家の言語(lugha ya taifa)だから」「皆と分かり合えるから」などであった。

7)　自民族語を望む回答は民族意識と深く結びついていると考えられる。Heine(1992)や Rottland & Okombo(1992)でも、ケニアのテリック人やスバ人の言語態度を調査している。「子供に習得させたい言語」として最も多かった回答は、やはりそれぞれの自民族語であった。

8)　例として、Masai, Sukuma, Gogo, Chagga, Haya, Nyakyusa, Hehe, Ngoni, Makonde, Nyamwezi などの言語が挙げられている。

9)　Batibo は Local Prestige の言語の例として Matumbi や Luo を挙げているが、別の箇所(p.88)で、近隣の言語に社会言語学的影響(sociolinguistic impact)を与えていると見られる言語を１０例挙げている。その中に、ケレウェ語に影響を与えるジタ語の例も挙げられている。近隣の言語に影響を与える言語も Local Prestige を有していると言えよう。

10)　４０歳以上で唯ひとり両親にスワヒリ語も使うと答えたのは、No.13 の女性(50 歳ケレウェ人)である。彼女はスワヒリ語も使う理由として、ナンシオの町暮らしであることと、父が小学校教師だったことを挙げた。本論では取り上げなかったが、言語の選択を決める要因として、親や自分の職業も関与する要因の一つになるであろう。

11)　年齢とスワヒリ語使用の相関は厳密に比例しているのではない。２０歳代と３０歳代を分けてみると、２０歳代では２９％、３０歳代では４２％と逆になる。年齢との相関はおおよその年齢層の区分の間で見られる傾向であり、ここでは低年齢層(１０歳代)、中

年齢層(２０～３０歳代)、高年齢層(４０歳以上)の３つに分けて見た。
12)　１０歳代の年齢層が家庭内の同世代に対して何語を用いるかを見るには、質問15(兄弟とは何語を使うか) がある。兄弟に対するスワヒリ語の使用は６３％(２４人中１５人)と、親に対する割合とほぼ同じである。ここでは年齢との相関が見られないが、少なくとも１０歳代では家庭内の言語使用が均一的であるように意識されていると考えられる。
13)　「延べ」は１０歳代(２５人)×２(父、母)の人数である。スワヒリ語しか使用しない１５人の内９人は非ウケレウェ生まれである。非ウケレウェ生まれの１０歳代では、５０％(延べ１８人中９人)が親に対してスワヒリ語のみを使用すると答えている。それに対して、ウケレウェ生まれでは１９％(延べ３２人中６人)とその割合は低くなる。
14)　具体的には相手の民族によって使用する言語が異なるが、ジタ/ケレウェ人に対しては、ジタ/ケレウェ語の使用が最も多い。
15)　この質問はやや誘導的で、実際より民族語の回答が多くなるようである。このような質問の形式には、無反省に「ジタ人にはジタ語」、「ケレウェ人にはケレウェ語」と回答してしまうことがあるようだ。例えば、No.55はケレウェ語は話せないと答えているにもかかわらず、ケレウェ人とはケレウェ語を使うと回答している。また、No.80,96はどちらの言語も話せないと答えているにもかかわらず、どちらに対してもそれぞれの言語を使うと答えている。このような点は問題であるが、この質問によって、家庭外でも民族語が使用されていることが明らかになり、またウケレウェに特徴的な民族語使用の実態を見て取ることができる。
16)　また、ケレウェ語がジタ語に類似してきていることも報告されている。Nurse & Philippson(1980:39)によると、ジタ語の属するSugutiグループとケレウェ語の属するRutaraグループの類似率は45.75%であるが、ケレウェ語とSugutiグループの類似率を見ると62.5%になる。これはケレウェ語がジタ語 (あるいは他のSugutiグループの言語)に影響を受けてきたためと考えるのが妥当であろう。
17)　また、(8b)でケレウェ人と話すのにジタ語を使うと答えた１５人の内、ケレウェ語が話せないのは６人であり、残りの９人はケレウェ語も話せるがジタ語を用いると答えているのである。
18)　言語の選択に際して、対話する当事者の人間関係 (上下関係や好悪の感情) が影響するのは、言語選択一般に見られることである。質問１９や２０の回答のコメントにもそれを見て取ることができる。コメントのいくつかを列挙してみる。

1. No.14(女50、ケレウェ)：Ｄさん(隣のジタ人の奥さん)と話す時にジタ語を使うとしたら、Ｄさんを喜ばせたい時ね。
2. No.28(女38、ジタ)：ケレウェ人にケレウェ語を使うのは、"Utani utani(冗談)"でね。
3. No.79(男32、ジタ)：妻(ケレウェ人)はジタ語も話せるけど、妻にはケレウェ語を使う。家庭平和のためにね。友人(No.18 男45、ジタ)も、奥さんがケレウェ人だけど、彼の所は、奥さんが彼を愛しているから、奥さんもジタ語を使うんだ。
4. No.11(男55、ケレウェ)：ジタ人にはケレウェ語を使って話すけど、相手にジタ人が多い時はジタ語を使うよ。
5. No.22(男43、ケレウェ)& No.78(男37、スクマ)：商売している市場ではスワヒリ語しか使わないけど、老人にはケレウェ語を使うんだ。
6. No.23(男42、ケレウェ)：老人達はスワヒリ語を使うと "Una majivuno.(威張っている)"って言うんだ。
7. No.93(男24、ケレウェ)：父(60歳くらい)は普段ケレウェ語を話すが、酒を飲んで酔うとスワヒリ語をよく話す。

1～3では、相手を喜ばせたり冗談で場を和ませたり、こちらが譲歩するためといった

ような効果をねらって言語選択がなされることを示している。また 4. では、数の力関係が言語選択を決定する要因になるというわかりやすい例を示している。5, 6 では、老人がスワヒリ語を話せないからケレウェ語を話すというのではなく、老人への敬意あるいはいたわり（老人はスワヒリ語より民族語の方が得意）を示すためにケレウェ語を用いることを表している。また、スワヒリ語が高い威信をもっていることは老人達にも意識されており、そのスワヒリ語を使うことは「威張っている」ということになる。その威信をもって自分の威信を高めようとする意識が、No. 93 の父には、酔う時にあからさまに現われるのであろう。

参考文献

BATIBO, Herman. 1992. "The fate of ethnic languages in Tanzania", in M.Brenzinger(ed.), 85-98.

BRENZINGER, Matthias(ed.) 1992. *Language Death*, Mouton de Gruyter, Berlin.

DOWNING, L.J. 1990. *Problems in Jita tonology*, Ph.D. dissertation, Univ.of Illinois, U.M.I.

GRIMES, B.F.(ed.) 1988. *Ethnologue: Languages of the world* (11th ed.), Summer Institute of Linguistics, Texas.

NURSE, Derek & G.Philippson. 1980. "The Bantu languages of East Africa: A lexicostatistical survey", in E.C.Polome & C.P.Hill(eds.), 26-67.

POLOME, Edgar C. 1980a. "The language in Tanzania", in E.C.Polome & C.P.Hill (eds.), 3-25.

1980b. "Tanzania: A socio-linguistic perspective", in E.C.Polome & C.P.Hill(eds.), 103-138.

POLOME, Edgar C. & C.P. Hill(eds.) 1980. *Language in Tanzania*, Oxford University Press.

ROMEAINE, Suzanne. 1994. *Language in Society*, Oxford Univ.Press, (邦訳)ロメイン、スザーン（1994）土田滋・高橋留美訳『社会の中の言語』三省堂

ROTTLAND, Franz & D.O.Okombo. 1992. "Language shift among the Suba of Kenya", in M.Brenzinger(ed.), 273-283.

竹村　景子　1993.「多民族国家における国家語の役割ータンザニアのスワヒリ語の場合」、『スワヒリ＆アフリカ研究』４号、34-99、大阪外国語大学スワヒリ語研究室.

YONEDA, Nobuko. 1996. "The impact of the diffusion of Kiswahili on ethnic languages in Tanzania: A case study of Samatengo", *African Urban Studies IV*: 29-73, ILCAA, Tokyo.